



薬局ヒヤリ・ハット事例収集・分析事業 共有すべき事例

2022年
No.9
事例2

疑義照会・処方医への情報提供

投与量



事例

【事例の詳細】

ニュープロパッチ9mg 1日2枚が処方されていたパーキンソン病の患者に、切り替えてハルロピテーブ32mg 1日2枚が処方された。添付文書を確認したところ、ニュープロパッチからハルロピテーブへ切り替える際の投与量として適切ではないと判断し、処方医に疑義照会を行った結果、ハルロピテーブ32mg 1日1枚へ変更になった。

【推定される要因】

処方医は、処方していた薬剤名のみを変更し、1日の枚数の修正を行わなかったと考えられる。

【薬局での取り組み】

同効薬へ切り替える際は、添付文書やインタビューフォームなどを見て用法・用量が妥当であるかを確認する。



その他の情報

販売名	ニュープロパッチ 2.25mg/4.5mg/9mg/13.5mg/18mg	ハルロピテーブ 8mg/16mg/24mg/32mg/40mg
薬効分類	ドパミン作動性パーキンソン病治療剤 レストレスレッグス症候群治療剤 (2.25mg/4.5mg)	ドパミン作動性パーキンソン病治療剤
有効成分	ロチゴチン	ロピニロール塩酸塩

2022年9月1日現在

ハルロピテーブ8mg/16mg/24mg/32mg/40mgの添付文書 2022年4月改訂（第1版）（一部抜粋）

- 17.臨床成績
- 17.1 有効性及び安全性に関する試験
- 17.1.3 国内第Ⅲ相試験（長期投与試験）
- 他のドパミンアゴニストから本剤への切り替え

ドパミンアゴニスト	用量 (mg/日)							
	4.5	9	13.5	18	22.5	27	31.5	36
ロチゴチン								
	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
本剤	8	16	24	32	40	48	56	64



事例のポイント

- ニュープロパッチとハルロピテーブは、経皮吸収型の非麦角系ドパミン作動薬である。ハルロピテーブ8mg/16mg/24mg/32mg/40mgの添付文書の臨床成績には「他のドパミンアゴニストから本剤への切り替え」が、インタビューフォームには「他のドパミンアゴニストから本剤への切替えタイミング」が掲載されている。
- ドパミンアゴニストの内服薬（速放錠、徐放錠等）や貼付剤が処方されていた患者にハルロピテーブが処方された際は、添付文書やインタビューフォームなどの情報を参考にしてハルロピテーブの投与量や切り替えのタイミングなどを検討することが重要である。
- 患者に処方されている薬剤が変更された際は、患者から薬剤の効果や副作用発現などに関する情報を収集し、変更になった経緯を把握する。さらに、交付後にフォローアップを行い、薬剤変更後の患者の状態を確認し、処方医と情報を共有することが重要である。



公益財団法人 日本医療機能評価機構
医療事故防止事業部

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町1-4-17 東洋ビル
電話：03-5217-0281（直通） FAX：03-5217-0253（直通）
<http://www.yakkyoku-hiyari.jcqh.c.or.jp/>

※この情報の作成にあたり、作成時における正確性については万全を期しておりますが、その内容を将来にわたり保証するものではありません。※この情報は、医療従事者の裁量を制限したり、医療従事者に義務や責任を課す目的で作成されたものではありません。※この情報の作成にあたり、薬局から報告された事例の内容等について、読みやすくするため文章の一部を修正することがあります。そのため、「事例検索」で閲覧できる事例の内容等と表現が異なる場合がありますのでご注意ください。